

1920～1930年代におけるサハの知識人と民族学的研究  
—— ロシア民族学史における断章 ——

Sakha National Intellectuals and their Ethnographical  
studies during the 1920s and the 1930s:  
a fragment of the History of Russian Anthropology

高倉 浩樹 (Hiroki TAKAKURA)\*

キーワード：人類学史、ソビエト民族学、ロシア、サハ、民族知識人

Keywords : history of anthropology, Soviet Ethnography, Russia, Sakka, national intellectuals

Abstract

Anthropologists and historians, recently, have developed the historical analyses of repressed Russian anthropology from the 1920s and 1930s in the former Soviet Union. They discuss the theoretical and institutional changes in anthropology or the implications of the transition from Russian *Ethnology* to Soviet *Ethnography*. The interest is also developing in the study of biographies of repressed ethnographers, who were the victims of Stalinist Purges. The repression and purges of anthropologists was not confined in the narrow sense to Russian intellectuals, but rather included many local and multiple ethnic intelligentsias. To explore the history of the repressed national intelligentsias and their anthropology is to view their works and lives in the context between national politics and the development of Soviet Ethnography. In this paper I try to describe the relations between the repressed Sakha national intelligentsia and their ethnographical studies, taking into account the socio-political conditions from the early 20<sup>th</sup> century to the 1930s. Through the analyses of some figures' biographies and their intercourse with each other, both in their research and political fields, I examine the interaction between their ethnographical studies and the socio-political activities of the period, and then consider the role and the significance of Sakha ethnography for themselves.

---

\* 東北大学東北アジア研究センター

## 1. はじめに

近年、1920-30年代におけるロシア民族学史すなわち抑圧と粛正にあった民族学の歴史についての研究が進んでいる。そこでは理論的な変化に加え、学術制度的な位置づけなど、いわゆるロシア民族学 (Russian Ethnology) からソビエト民族学 (Soviet Ethnography) への移行に関わる諸問題が論じられている。当時、マルクス—レーニン主義イデオロギーは民族学を含むあらゆる社会科学に影響を与えたが、その状況下での民族学の分析対象の変化や、国家の民族政策における民族学者の役割などが論じられてきた [Slezkine 1994; Shnirelman 1996; Соловей 2001; 栞本 1993; 佐々木 2002]。同時に抑圧・粛正された民族学者についての伝記的研究も進んでいる [Рештов 1994a, 1994b; Тумаркин 1999]。こうしたなかでロシア・ソビエト民族学を担った非ロシア系の研究者とりわけモスクワやペテルブルクといった中央以外の場で活躍した民族知識人に対する研究は十分行われているとは言い難い。より精確にいうなら、民族知識人——本稿の文脈においては、非中央・非ロシアの属性を有し、自らの民族的属性を自覚的に意識する知識人、として範疇化される——の人生と研究についての個人史的研究と、モスクワ・ペテルブルクを中心とした抑圧・粛正の民族学史研究は十分関連づけて論じられてはいないのである。

本稿は上記の問題意識の下に、シベリア東部のチュルク系民族サハ人 (ヤクート)<sup>1)</sup>に対する1920年代から1930年代の民族学<sup>2)</sup>的研究動向に焦点をあて考察を試みるものである。当時サハの民族学的研究に従事したのはロシア人以外にも幾人ものサハ人知識人が含まれていた。その端的な事実すらが近年まで十分に知られているとは言い難かった。なぜなら彼らの多くは1930年代末には「反革命」「ブルジョワ民族主義者」という名の下に粛正されてしまったからである。加えて彼らの著作を研究対象として取り上げること自体がタブーとされた時期も存在した。こうした諸要因が、1930年代までのサハ人研究者によるサハ民族学研究を、少なくともロシア・ソ連外部にいる外国人研究者にとって見えにくいものとしたのであろう。そのことに気づかされるのは民族知識人への再評価が、ソ連崩壊以降の1990年代に著しく顕在化するようになったからである。復刻版の出版が行われたほか、サハ人研究者によって数多くの伝記的及びその歴史的背景に関する研究が急速に進んだ。

いうまでもなく、この状況はソ連崩壊前後からの民族主義の台頭、歴史観の問題、ロシア・ソビエト民族学史の位置づけといったより幅広い諸問題に絡むものである。付け加えるならそうした問題はサハ人だけの問題ではなくむしろ旧ソ連各地における民族知識人全般に関わる問題である [例えば、宇山 1997]。本稿はこうした諸問題を念頭におきつつ、近年蓄積されるサハの民族知識人に関する研究を参照しながら、1920年代から1930年代におけるサハ民族学研究の進展と知識人の関係について考察を試みるものである。まずこの時代のサハ民族学的研究がその前後の文脈のなかでどのような位置づけを占めるかを解明し、さらに主たる民族知識人の個人史を紹介すると共に、彼らが輩出される歴史的背景を当時の政治社会的状況をふまえながら描写したいと思う。こうした作業を通して、20世紀初頭のサハ民族学研究の担い手達とその相互関係さらに彼らの研究の意義について一定の見取り図を提示し、その上でこれがロシア民族学史のなかでどのように位置づけられるのか考えてみたい。

## 2. 流刑民族学者からソビエト民族学者へ

サハ人に対する民族学的研究は古くは帝政ロシア科学アカデミーによる調査にさかのぼる。18世紀初頭のアカデミー創設以来、幾度となくサハ人の分布するヤクーチア地域も含む学術調査が繰り返された。1845年に帝政ロシア地理学協会が創設され、1851年にはシベリア支部が設けられ現地調査が頻繁に行われるようになったが、その多くは民族学的調査を含むより広い意味での博物学調査だった。具体的には以下の通りである。1725年のアカデミー創設以降、第一次カムチャッカ調査（代表：ベリング V. Беринг）、メッセルシュミット（Д. Г. Мессершмит）によるシベリア調査（1720-1727年）、ミッレル（Г. Ф. Миллер）やグメーリン（И. Г. Гмелин）らが参加した第二次カムチャッカ調査（1733-1743）、イスレニエフ（И. И. Исленьев）とゲオルギ（И. Г. Георги）による調査（1768-1774年）、サリチェフ（Г. А. Сарычев）とメルク（К. Мерк）による調査（1785-1792年）等がある。19世紀に入ってから1820-24年のブランゲリ（Ф. П. Врангель）による調査、1842-1845年のミッテンドロフ（А. Ф. Мидлендорф）の調査が続いた。19世紀後半以降はより地域を絞った調査が行われた。ヤクーチアを直接対象とした調査には以下がある。1854-55年のマーク（Р. К. Маак）によるヴェルイ地域調査、1866年クロポトキン（П. А. Кропоткин）によるオレクマ・ピッチム地域調査、さらに1868-70年にはマイデル（Г. М. Майдел）を中心とするチュコトカ調査隊がヤクーチア北東部について、さらに1873-75年にはチェカノフスキー（А. Л. Чекановский）らによるオレニョク地域調査が行われた [Ермолаева 2001 : 30-35]。

これら博物学的調査が本格的な民族学調査へと転換するのは、長期にわたって現地に滞在することを余儀なくされたナロードニキ政治犯流刑囚らによる民族誌的調査が行われるようになってからある。19世紀末から20世紀初頭にかけては、ベルホヤンスク地域のサハ人とエヴェン人のフォークロアと民俗慣習を記録したフジャーコフ（И. А. Худяков）を筆頭に、サハ人の慣習法について考察したヴィタシェフスキー（Н. А. Виташевский）とレベンターリ（Л. Г. Левенталь）、ロシア人農民と定住化した先住民について書いた I. マイデル（И. И. Майдел）などがある。さらにサハ民族誌の古典的研究として日本人類学及び西欧・北米人類学でもよく広く知られるのはシェロセフスキー（В. Л. Серошевский）、ペカルスキー（И. В. Пекарский）、ボゴラス（В. Г. Богораз）、ヨヘリソン（В. И. Иохельсон）などである [Иванов 1971 : 107 ; Гурвич и Пухов 1958 ; Theodoratus 1977]。政治犯流刑囚達は、比較的自由的な行動が許された流刑地において現地語を学び民族学の世界にはいつていった。そうした彼らが公式な立場で調査する機会を与えられたひとつが、帝政ロシア地理学協会東シベリア支部主催によるシビリャコフ調査だった。金鉱所有者であった父の膨大な遺産を受け継いだイルクーツクの産業家であるシビリャコフ（И. М. Сибиряков）によって出資されたこの調査は、鉱山の開発と先住民の生活条件との関係を解明することが当初の目的だったといわれている。1894-96年にかけて上述の政治犯流刑囚のほとんどを含む15人そして4人のサハ人が加わって民族学調査を含む総合調査が行われた [Ермолаев 2001 : 35 ; Малькова 1994 : 88-93]。その成果のいくつかは1910年代までに発表された。

ロシア革命（十月革命）以降から1930年代末までの研究動向は大きく3つに分けられるといわれている。第一にシャマニズム研究である。これは当時のソビエト社会主義建設と関係している。というのも住民の宗教・信仰形態を明らかにすることは後の宗教政策とも絡んでいたからである。当初はサハ人自身の研究者はおらず、ロシア人研究者がその中心だった。先にも挙げたヴィタシェフスキーのほかに V. イオノフ（В. М. Ионов）、ドゥラベルト（П. Л. Драверт）らによって資料が収集された。1920年代に入るとサハの知識人による研究も成果となって現れている。特に重要なのは、クラコフスキー（А. Е. Кулаковский）、クセノフォントフ（Г. В. Ксенофонов）といった当時のサハの政治と文化に大きな影響を持っていた民族知識人の研究である<sup>3)</sup>。とりわけクセノフォントフはブリヤートやハカス文化などと比較する形でサハのシャマニズム研究を行っている。1930年代末には、その後ソビエト民族学を代表する一人になるロシア人研究者トカレフ（С. А. Токарев）が歴史文書を用いながら17世紀のサハのシャマニズム復元研究を行い、さらに1949年には A. ポポフ（А. А. Попов）がヴェルイ地域の資料を報告している [Парникова 1971 : 33-35]。

第二の潮流はヤクーチアにおける民族構成つまり人口や民族分布に関する研究である。これは一番目の動向以上に当時の行政・民族政策と関連している。1922年ヤクート自治共和国がソ連邦内ロシア連邦共和国に設立されたあと、後に詳しく検討するが1925-30年にかけて自治共和国の領域に対する総合現地調査が当時の科学アカデミーによって行われた。この調査は当時の全ロシア中央執行委員会幹部会付属ヤクート共和国全権代表であったサハ人 M. アモソフ（М. К. Аммосов）のイニシアティブによって実行されたが、調査にはクセノフォントフのほか、当時社会運動家・民族主義者として知られていたニキーフォロフ（В. В. Никифоров）などのサハ人も参加している [Ермолаева 2001 : 67,127 ; Макаров 1986 : 8]。残念ながらこの総合調査の成果は少なくとも民族学分野に関してはそれほど刊行されていない。その関係者のマイノフ（И. И. Майнов）や G. ポポフ（Г. А. Попов）らによる歴史的復元研究も含めたものがわずかに知られるほどである [Парникова 1971 : 35]。

第三の問題は、民族起源論である。ノソフ（М. М. Носов）、コズィーミン（Н. Н. Козьмин）、ペトゥリ（Б. Е. Петри）らによって1920年代後半に相次いで発表された論考では、サハの南方起源説が出された。さらに1930年代末にはこれを踏襲する形で、クセノフォントフ及びボロ（С. И. Боро）によって、歴史・言語学・考古学・フォークロア資料を駆使したサハ人の起源と現在のレナ川中流域への移住の経路の問題について先駆的な考察がなされている [Парникова 1971 : 36]。なお、この時期にはホローシフ（П. П. Хороших）らによって帝政時代から20世紀初頭にかけてのサハ及びヤクーチア民族学に関わる広範な文献目録が作られていることも追記しておこう [Хороших .1924]。

第二次世界大戦をへて、1947年にはソビエト科学アカデミーに付属するヤクーツク科学研究センター（база）が設立されるが、これ以降より本格的な民族学研究が行われようになった。すでに1935年にはソ連時代のヤクーチア民族学研究の中核となる「言語・文学・歴史研究所」が P. オユンスキー

(П. А. Ойунский) を初代所長として設立されていたが(当初は「ヤクート自治共和国人民委員会議付属言語文化研究所」、1947年にこの研究所はソ連科学アカデミー下に統合された [Антипин 1963: 190; Ермолаева 2001: 141]<sup>4)</sup>。同時に様々な学術雑誌出版体制も整えられた。たとえば先の研究所の紀要<sup>5)</sup>、またヤロスラフスキー・ヤクーツク郷土博物館やヤクート自治共和国中央公文書館といった研究施設による出版物である [Парникова 1971: 39]。

制度的な充実の結果は、1950～1960年代にかけて相次いで現れるようになった。それらの多くはソ連中央の研究者が先導するものであり、モスクワやレニングラードにおいて出版されたため、日本・西欧・北米においてもよく知られている。ノソフ、プリイトゥコワ (Н. Ф. Прыткова)、А. ポポフによっても伝統的衣類及び住居に関する研究が行われているほか、キエフ生まれのサハ人であるイオノワ (О. В. Ионова) によるサハの伝統的牧畜と住居に関する物質文化研究がある。こうした物質文化研究の成果は、他のシベリア諸民族のものとも集大成され、1961年に刊行される有名な「シベリア歴史・民族誌アトラス」 [Левин и Потапов (ред.) 1961] となって結実した。またソビエト民族学のシベリア研究の黄金期を担うドルギフによる「17世紀のシベリア諸民族における氏族的・部族的構造」 [Долгих 1960] やグールヴィッチの「東北シベリア民族史」 [Гурвич 1966] など広域にわたる民族史的考察のなかでヤクーチア及びサハ研究も進められた。後にソ連考古学を牽引するオクラドニコフは、サハの民族起源論を含めたロシア植民地化以前の先史時代について精力的に研究をおこなった [Парникова 1971: 40-42]。

さまざまな意味で重要なのは17世紀末から18世紀前半のサハの社会構成とりわけ私的所有の始まりに関する議論——すなわち唯物史観的發展段階論におけるサハ社会の封建制の性質をめぐる諸問題——である。これは先に挙げたロシア革命前の政治犯流刑囚ヴィタシェフスキーやマイノフらの民族誌によって1910～20年代に先鞭がつけられた議論であったが、史的唯物論の立場からより本格的な検討をおこなったのはトカレフである。1945年に出版された「17～18世紀のヤクートの社会構成」 [Токарев 1945] のなかで、著者はサハ社会の土地私有化は18世紀後半の毛皮税(ヤサク)の課税単位が土地に変わってから出現するのであると結論づけた。この問題は土地の封建的所有への変化がサハ社会内部から発生するの否か＝サハの社会發展段階の規定に関わる極めて重要な問題であった。これはその後ロシア人とサハ人研究者がほぼ対立する形で、すなわちドルギフやグールヴィッチらと、バフルーシン (С. В. Бахрушин)、イオノワ、バシャーリン (Г. В. Башарин)、Р. ソフロノフ (П. С. Софронов)、そして V. イワノフ (В. Н. Иванов) と連なりながら1960年代まで続く論争となったのである [Софронов 1971]。

こうしてみると、ほぼ1940年代を境にして、サハ民族学研究はそれ以前と大きく性質を変えたことがわかる。それは所謂サハ人の文化と歴史に焦点をあてた民族誌記述ないし比較民族学的分析から、隣接する諸民族との比較を行いながら史的唯物論的文脈に彼らの文化と歴史を位置づけようとする研究に転換したとことである。さらにモスクワやレニングラードなど中央の民族学者が牽引するかたちで研究の生成や論争が展開したことも注意すべきだろう [Иванов 2000: 11]<sup>6)</sup>。

1920～30年代のサハ民族知識人による民族学的研究というのは、これまで描写してきた19世紀末から20世紀初頭の政治犯流刑囚らを中心とする古典的民族誌と1940年代以降のソビエト民族学によるシベリア研究の黄金期を形成する研究との間に位置するものである。そして着目しなければならないのは、この時期にサハの知識人による民族学的研究が本格的に始まるということだ。そうしたサハ人最初の民族学の担い手の多くは1930年代末までにはスターリン治世下で粛正されている。そのこともあってだろうか（後の1950年代後半以降にその多くが名誉回復されるが）、1940年代以降より制度的に確立されたソビエト民族学にあって彼らの業績がこれまで十分に光が当てられてきたとはいえないのである。

この空白はいうまでもなく、ソ連時代の民族と文化をめぐる政治が大きく絡んでいる。先に紹介した17～18世紀前半におけるサハの社会構成に関する論争のサハ側の主要な担い手であったバシャーリンは、彼の先達である民族知識人クラコフスキーらの研究及び文芸活動を評価する著作「啓蒙主義的かつ現実主義者であった三人のヤクート人」〔Башарин 1994〕を1944年に出版した。これはクラコフスキー、A. ソフロノフ（А. Софронов）、N. ネウストロエフ（Н. Неустроев）という革命以前から活躍したサハ民族知識人の第一世代の役割——サハは無文字社会であり、豊富な口頭伝承という伝統があったが、そこから文字化された文芸作品創造への橋渡しを行った——を評価するものであった〔Спиридонов 1994：3-5〕。しかしこのうちの一人クラコフスキーはすでに当時のソビエト政権にとって反革命的・ブルジョワ民族主義的と烙印が押されていた。1943年3月1日にはソ連共産党ヤクーツク州委員会によって彼の研究・印刷・販売が禁止する決定がされていたからである〔Алексеев 1996：5〕。当然の結果として、ややしばらく後だが、1951年1月のソ連作家同盟会議上、さらに同年12月10日の全国紙プラウダ誌上の記事「ヤクート文学史の正しい解釈のために」でバシャーリンは公に批判される〔Борисов 1951〕。また同様の例として、先に紹介したサハ人のクセノフォントフは1938年粛正されたが、彼の代表的著作「ウランカイ・サハラル：ヤクート人の古代史概説」は一時期引用すら禁止されていたのである〔Иванов 1992：5〕。

状況が大きく変わるのは1980年代後半以降である。旧ソ連各地における民族復興現象はヤクーチアでも現れたが、そのなかで革命前から1930年代末に活躍した民族知識人を再評価し、その個人史研究と彼らの研究の復刻が行われるようになったからである。実際、先のバシャーリンの著作もさらにクセノフォントフの著作も1990年代初頭に相次いで復刻された。前者の復刻版序文を担当したスピリドノフは「この本は偉業であり、この本は伝説だった」と冒頭で述べている〔Спиридонов 1994：3〕。

1920～30年代という時代は、サハ人自身によるサハ民族学研究が実際に出版という形で現れ始めた時期であり、同時にその担い手達は当時の複雑で激しい政治過程——より正確には1905年の第一次革命から続くものであるが——に自らをゆだねた時期でもあった。以下ではそうしたサハ人知識人の個人史を紹介することで、彼らがいかなる歴史的背景のなかにおいて自らの研究とそして政治・社会活動をおこなっていたのか探っていきたい。

### 3. サハ知識人の人生と研究

ここで取り上げるのは、20世紀初頭から1920～1930代に活躍した三人のサハ民族知識人である。彼らはいずれも政治・社会的活動に従事しており、しばしば「サハ人最初の」という枕詞とともに語られる人々である。サハ人最初の劇作家といわれる V. ニキーフォロフ (В. В. Никифоров)、サハ文学の創始者である A. クラコフスキー (А. Е. Кулаковский)、さらにサハ人最初の歴史家である G. クセノフォントフ (Г. В. Ксенофонов) ——この三人の個人史を年譜風に述べてみよう。

#### 3. 1. ワシリイ・ワシリヴィッチ・ニキーフォロフ (1866-1928)

1866年ヤクーツク管区デュプシン郡 (Дюпсинский улус) テビコフ郷 (Тебиковский наслег) に生まれる。彼の父は郡役場の書記であったが、ニキーフォロフが4歳の時に死亡している。母の実家は裕福で、彼女自身は文盲であったが、子供の教育には熱心であった。ニキーフォロフ自身は彼の郡にいたナロードニキ政治犯流刑囚と交流しながら影響をうけ、その後ヤクーツクの四年制中学校 (прогимназия) に入学した。そこで彼と共にサハ民族知識人の第一世代となる K. ネウストエフやアフアナシエフ兄弟らと出会っており、彼らと共に政治犯流刑囚 P. ポドベリスキー (П. П. Подбельский) のサークルで勉強を続けた。このサークルは今日



V.V.Nikiforov [Diakonova 2002 : 54]

の研究者によって、将来のサハ知識人達が集って教育と政治的素養を身につけた最初のものであったと評価されており、ニキーフォロフ自身もポドベリスキーなしには自分たちがロシア文学や社会科学を学ぶことはなかったと回想している [Дьяконова 2002 : 54-55 ; Малькова 1994 : 7-18]。

通信教育で法学をみにつけた後、1890年代前半には故郷のデュプシン郡の郡長として働き、1896年にはヤクーツクの統計委員会で勤め始めた。この間も、ナロードニキ政治犯との交流は拡大し、サハの英雄叙事詩オロンホのロシア語訳などを行うなど当時民族学・言語学的研究を行っていたペカルスキーに協力しはじめていた。また1894-96年にはシビリャコフ調査隊に加わり、サハの民族学調査を行った。その成果は「ヤクートの家族に関する慣習」として発表された。その一方でヤクーチアの農牧業の貧困な状況を改善するために1899年6月には、ヤクート農業協会の設立に寄与した。彼は「ロシア農業及び自由経済協会」から雑誌を寄与してもらうなどして新しい技術と知識の導入を図るほかに、試験農場を開くなどした。また1905年には学校教育の普及を目的とする啓蒙協会「光<<Сырдык>>」を結成し、その後1914年には第一回ロシア教育会議にヤクーツクからの代表団の一員として派遣されている [Малькова 1994 : 83-87 ; 107-109]。

1902年にはヤクーツク管区裁判所付き弁護士として働き始めていたが、1905年第一次ロシア革命後の十月詔書をうけて、1906年1月4日に「ヤクート同盟 (Союз якутов)」を結成した。ヤクート同盟とは、帝政政府に対し、サハの土地権の回復と民族自治及び議会設置の要求を主とする綱領をも

つ政治団体であった。19世紀初頭のスペランスキー時代にわずか10年ほど実施されたヤクート（サハ）・ステップ会議の廃止以来、サハ人にとって自治は悲願であった。1905年4月の「シベリアにおける実施についての命令」が出た後、この自治にサハ自身がどう関わるかは緊急を要する問題となった。ニキーフォロフによる同盟の結成は、こうした文脈に寄りそうものなのである。当時のヤクート州知事ブラトフ（Булатов）はこの団体を民族的革命組織と認定し、イルクーツク総督府に軍隊の派遣を要求した。その後ニキーフォロフを含む10人の中央執行委員が逮捕され、同盟の政治活動は頓挫した。この間、運動の仲間からの様々な裏切りにあって失望したニキーフォロフは、獄中において自らの信念をよりわかりやすく一般の人々にも広めるために、戯曲「マンチャーリ（Манчаары）」を執筆したのである。これは、帝政ロシアの圧政とこれに荷担する役割を果たしていたサハの富裕層トヨンに対して反乱を起こした19世紀中葉に実在した義賊の話である。ニキーフォロフは当時サハ人の間に流布していた民衆英雄の伝説を用いながら、民族の統一のシンボルを作り上げたのだった〔Гоголев 2000 : 178–182 ; Diakonova & Romanova 2003 : 19 ; Katsuki 2003 ; Клиорина 1991 : 137–171〕。

その後釈放されたニキーフォロフは、反帝政政府活動を継続する一方で、サハ語新聞・雑誌の発行に関わったほか、トルストイやゴゴリの翻訳なども行っている。1917年二月革命が起こると、中央の臨時政府はヤクーチアに地方自治を導入したが、そこでニキーフォロフは県地方自治庁のトップ（глава губернской земской управы）に任命された。十月革命をへて内戦期にはいり、1919年1月にはヤクーチアはコルチャク権力下におかれるが、ニキーフォロフは個人的にコルチャクの知己であったこともあり、彼が招集した国家経済会議（государственное экономическое совещание）にも参加した。1919年12月にヤクーツクがボリシェビキ権力下におかれると、ニキーフォロフは逮捕された。イルクーツクで獄中生活を送っていたが、その後恩赦となり、1922年ヤクート自治共和国が成立した後、彼はヤクーツクに帰還した。

ボルシェビキ体制下で、ニキーフォロフは政治的な要職につくことはなかったが、文化行政の仕事及び研究活動に従事するようになった。1924年中央東洋出版局ヤクーツク支部が設立されると、当時自治共和国権力の中核にいたサハ人 M. アモーソフはニキーフォロフを支部書記に任命している。同年、当時中央の民族学者として有名だったボゴラスやシュテルンベルクも含まれていたシベリア・ウラル・極東研究協会の執行委員会のメンバーとなっている。さらに1924年には所謂北方委員会のなかの法・行政委員会で働いていたほか、第5回コミンテルン大会で国際プロレタリアート作家協会の中の「シベリア異族出身プロレタリアート作家」国際ビューローに招待されている。1925–26年には後述するソ連科学アカデミーのヤクーチア総合調査に参加し、イルクーツク大学の V. ポドゴルブンスキー（В. И. Подгорбунский）と共に民族学的調査に従事した。特にヴィルイ管区内部の15の郷（наслег）とオレクマ管区の7の共同体（общество）を対象にした人口学的情報の収集で、ニキーフォロフは698の居住地点の4,538世帯、合計18,606人の資料を収集したのだった。また1925年にはバクーで開催された第一回テュルク学会議に、個人の資格で招待されている。こうしてさまざまな学術



活動・文化行政で活躍していたが、1927年9月18日、反革命容疑で逮捕され、強制収容所での10年の刑となったが、翌1928年9月15日に62歳で獄死した [Клиорина 1991: 7-8; Ермолаева 2001: 95]。

### 3. 2. アレクセイ・エリセエヴィッチ・クラコフスキー (1877-1926)

クラコフスキーは、1877年3月6日ヤクーツク管区バトゥールス郡 (Батурусский улус) 第四ジョフソゴン郷 (IV Жехсогонский наслег) の中流家庭に生まれた。両親は文盲だったが教育熱心で、1910年にはヤクーツクの神学校にすすみ、その後実科中学校で学んだ。そして歴史と文学に関心をもつようになり、とりわけロシア文学に親しんだ。1897年に卒業した後、故郷にもどって当初はバトゥールス郡異族管理部の書記官を勤めたが、まもなく辞め、その後教師をしながら、ヤクーチア各地を転々とする生活を送った。彼は、サハの口頭伝承、言語・民族学的資料を収集しながら、民族の生活を題材にした文芸活動をおこなっていたのである [Дьяконова 2002: 124-126; Алексеев 1996: 8]。



A.E.Kulakovskii [Diakonova 2002: 125]

1900年にはサハ語による最初の文芸 (詩) 「バヤナイの呪文 (Байанай алгыһа)」を出版した。その後、ロシア文学 (レルモントフ) のサハ語翻訳も手がけながら、自らのさまざまな作品を残した。そのなかにあって重要なのは1910年の詩「シャマンの夢 (Ойун туулэ)」である。これは文字通りシャマンが自らの夢を人々に語るかたちで紡がれるが、帝政ロシア政府の圧政に対する批判が基本的なモチーフである。口頭伝承を利用しながら、シャマンが見ることのできる当時の社会状況を批判的に描き出している。サハの伝統的世界観において、シャマンは現実の世界と天の世界とをつなぐ媒体であるわけだが、この作品のなかでシャマンはむしろサハの伝統世界とロシア=西洋世界との間をつなぐ媒体である。そうしたシャマンが語る状況は、クラコフスキー自身も含めた知識人達の現状認識の比喩なのであった。シャマンは読者に対し、「強く古い民族 (народ) と若い民族が共に暮らすとき… (後者は) 永遠に恵まれないままであろう」とし、その二つの民族が戦えば後者は「消え去るであらう」と述べている [Кулаковский 1977: 234; 1990: 183]<sup>7)</sup>。これがロシア人とサハ人の関係を対比させていることは言うまでもない。その一方でロシアとサハの関係について別のテキストではより踏み込んだ意見を述べている。「ヤクート知識人への手紙」のなかで、ヤクーチアは日本、中国、或いはアメリカに譲り渡すべきかと問いかけている。その答えは否であり、むしろ隣人としてのロシア人とともに生きるべきであると述べている [Кулаковский 1992: 44]。この点について先のバシャリンは「シャマン (クラコフスキー) はロシアの呪術すなわち文学や科学・技術にこそ感嘆すべきであると人々に訴えかけている」と解釈している [Башарин 1994: 22-23; Дьяконова 2002: 126; cf: Зелинский 1970: 45-46]。

二月革命の時期、クラコフスキーは北部ヤクーチアにいたが、このことは彼のその後人生を複雑にした。それは北部ヤクーチアが十月革命そして内戦期においても、反ボリシェビキ政権の支配下におかれたからである。実際、1917年8月に当時の社会革命党（エスエル）のV. ソロビヨフ（В. Н. Соловьев）に率いられたヤクーツク政府は、クラコフスキーをベルホヤンスク管区のコミッサール（政治委員）に任命し、1918年12月までその職にあった [Башарин 1994 : 46-47]。クラコフスキーは反革命政府を支持する声明を発表したが [Демидов 1978 : 166]、1919年ボリシェビキ権力下に入ったヤクーツクに戻り、そこで県革命委員会人民教育部付属ヤクート地方調査課の研究員となった。その半年後には同部の文芸課主任に任命されている [Зелинский 1970 : 56-57]。その一方で、1921年9月にはネリカンにおいて200人ほどの反革命勢力の武装蜂起が起きたし、また1922年にはチュラプチにおいても反革命運動が起きているがその双方に、積極的にクラコフスキーは関与していた [Демидов 1978 : 269-281]。

1920年以降彼は精力的に文化・学術活動を行うが、この時期に民族学関係の論考を発表している。さらに1925年にはすでにヤクート自治共和国の初代中央執行委員会議長を務めていたサハ人のP. オユンスキーらとともに学術研究協会「サハ・ケスキレ（Саха кэскилэ）」をつくった。さらに同年12月バクーで開催された第一回テュルク学会議にヤクート自治共和国から派遣されたが、この帰路に病気となり、1926年6月6日モスクワで客死した [Бурцев 1994 : 158 ; Зелинский 1970 : 59]。

多くの研究においてクラコフスキーは非マルクス主義者であり、当初は十月革命の意義を理解せず反ボリシェビキ側に立ったが、最終的にはソビエト政権を受け入れたと指摘されている。実際に、1925年に出版された彼の詩はソビエト体制・赤軍・ボリシェビキ党を賞賛している [Башарин 1994 : 29]。ソビエト政権の受容——これは先に紹介した1950年代にプラウダ誌で批判されたバシャーリンの著作においても、そして1970年に発行された「ヤクート・ソビエト文学史概説」においても同様である [Башарин 1994 : 49-50 ; Зелинский 1970 : 59]。しかしクラコフスキーが真に自己変革したかどうかを問題にするよりも——バシャーリンが自らの著作の結論で指摘しているように——彼の人生は文学芸術・思想・政治的発展の道において複雑で矛盾に満ちている [Башарин 1994 : 55] ——この側面にこそ彼の特徴があるといえよう。この点について近年の研究は次のように指摘している。クラコフスキーが問うたのは、サハが模範とすべき国家及び文明がアメリカ・日本・中国のいずれかなのか、或いはロシアのなかで発展することなのか——である。そしてその答えは17世紀以降ロシア文明との相互作用のなかであったサハ社会の歴史であり、その文脈にそってサハ文化の発展を考えなければならない [Дьяконова 2002 : 128-129]。それは彼がフォークロア・民族学的資料に親しみながら研究そのもの自体よりむしろサハ文学の創造——精神文化の発展——に力を注いだことに現れているのである<sup>8)</sup>。

### 3.3. ガブリエル・ワシリエヴィッチ・クセノフォントフ (1888-1938)

クセノフォントフは、1888年4月4日ヤクーツク管区西ハンガル郡 (Западно-Кангаласский улус) の第四マリジェガル郷 (IV Мальжегарский наслег) で裕福な家庭に生まれた。数人の子供に早死にされていたその両親は、「不浄の力」をおそれて、子供の養育を同じ郷内のスレプツォフ一家に預けたという。郷内で初等教育を受けた後はヤクーツクの養護施設で育った。1899年に実科中学校に入学したが、この当時冬は生家で暮らし、夏は養家で過ごすという生活だった。1905年4月にヤクーチアで最初の非合法マルクス主義サークル「マヤク (Маяк)」が社会民主主義者の政治犯流刑囚によって結成されると、これに参加した。1907年に実科中学校



G.V.Ksenofontov [Ksenofontov 1992]

卒業後、一年を経て1908年にトムスク大学法学部に入学した。そこでシベリア民族学者 G. ボターニン (Г. Н. Потанин) の学生らによって結成されていた民族学サークルに接し、民族学を学ぶことになった。1912年から1年間トムスクにおいて弁護士助手として働いたが、その後ヤクーツクに帰郷した。その後1917年まで弁護士活動を続けるが、同時に民族学への関心を失うことなくフォークロア資料などの収集を行っていた [Григорьев 1978: 163-164]。

二月革命がおきると、クセノフォントフはニキーフォロフとの協力の下にヤクート連邦主義者勤労同盟 (Якутский трудовой союз федералистов) を組織した。十月革命で「同盟」運動が挫折すると、クセノフォントフは政治活動から身を引き、研究へ傾斜するようになった。特に信仰関連の民俗資料に関心を持つようになっていた。そして1920年にはイルクーツク大学社会科学部の助手として考古学・民族学の研究をより本格的に行い始めた。当時イルクーツクには B. ペトリ (Б. Э. Петри)、P. ハローシフなど著名な学者がおり、考古学・民族学分野は充実していた。彼らに師事しながら、サハの民族起源論に取り組むようになったのである。1922年にはヤクーツクに戻り通商産業人民委員部の北方課の書記官として働き、その後1925年には教員人民委員部 (Наркомпрос) の研究員の職に就いている。この間、ヴィルイ地域や北方地域 (オレニョク川下流) でフォークロア・信仰儀礼の民族誌資料を収集したほか、ハカシヤや西ブリヤートも訪れ、比較民族学のための調査も行った。そうした成果は1937年刊行の「ウランカイ・サハラル: ヤクート古代史概説」で形となった [Григорьев 1978: 39; Радченко 1999]。

この本 [Ксенофонтов 1992a; 1992b] は、サハ人の民族起源とりわけ現在の中心的生活域であるレナ川中流域の移動拡散過程を、ヴェルイ地域・北方 (オレクマ) 地域・中央 (レナーアムガ) 地域の民族文化の偏差をふまえながら論じた大著である。クセノフォントフは、当初サハ人はヴィルイ地域に分布し、その後一部はさらに北部 (オレクマ川下流=北極海沿岸) に移動して北方サハとなり、その後ヴィルイに残った集団から中央 (レナーアムガ) 地域へ移動したと考えた。残念ながら、これは現在の研究者には受け入れられておらず、現在定説となっているのは1630年代に中央地域から

ヴィルイ地域への移動があったということである。その他バイカル地域からの民族移動の時期や「古代」の政治体制についての見解についても多くが否定されている。しかしながら、フォークロア資料を丹念に分析することで、そこに民俗文化の多様性と時間的な秩序を読みとり、サハの基層文化の複合性を指摘したこと——それは無文字社会におけるフォークロア資料の位置づけを明確にした先駆的業績であるといえよう。この出版の同じ年に、クセノフォンフはさらなる研究を進めるために、モスクワに移住した。しかし翌年1938年4月に逮捕され、同年8月28日に銃殺刑の判決、そして刑はその日のうちに執行されたのである [Григорьев 1978 : 166 ; Иванов 1992 : 6-10]。

#### 4. 政治と学術の交差

これまで紹介してきた三人の知識人はそれぞれちょうど十才づつ離れた世代に位置しているが、さまざまな形でその人生は交差している。そしていくつもの共通性がみられることがわかるだろう。その第一は、彼ら三人が初等教育以上の教育を受けていたことである。第二に政治犯流刑囚との関わりである。彼らは程度の差こそあれ、一様に人生の早い段階からナロードニキ政治犯と接触し、さまざまな影響をうけている。こうした経験は、当時のサハ民族知識人全体にいえることである。当時の政治犯流刑囚のなかには、19世紀末から20世紀初頭に行われた現在古典となっているサハ民族誌研究を行った者がいたことはすでに述べたとおりである。彼らの影響は、何も民族学や言語学、フォークロア研究といった領域だけにとどまらない。ニキーフォロフやクラコフスキーがロシア文学のサハ語翻訳を試みているように、またクセノフォンフがトムスク大学で法学を修めたように、文学をふくめた学術・科学的知識の窓は、帝政ロシアの植民地主義の制度的端々に存在していたのである。

興味深いのは彼らは三人とも帝政ロシア政府の行政・法務関係職についた経験を持っていたことである。同時にそうした実務家並びに地方エリートとして人生をその後送ることを選択しなかったことも共通している。彼らの個人史からは自由と独立を好んだ性格だったことが伺えよう。

先に紹介したようにニキーフォロフはヤクート同盟を結成に先だって、1905年8月に「啓蒙協会」をI.ゴボロフ (И. С. Говоров) らと設立したが、そのアイデアは政治犯流刑囚で民族学者のV.イオノフだったといわれている。この団体はサハの精神文化及び物質文化の収集を行うと共に、サハ語の識字教育、文学の翻訳を行い、さらに協会付属の「異族 (ヤクート) クラブ Инородческий (Якутский) клуб」を設けた。これは1880年代のロシアでみられた公民館 (народный дом) をモデルとするもので、このクラブでニキーフォロフの戯曲「マンチャーリ」も上演された。初演はクラコフスキーが主役を演じたのであった。また同様の団体はクラコフスキーも作っており、彼はソフロノフらと共に1910年に「ヤクート文学愛好クラブ」を結成し、自ら文学作品を発表すると共に、サハ文学のロシア語翻訳、ロシア文学のサハ語翻訳を行った [Антонов 1998 : 10-11 ; Малькова 1994 : 169]。

そうした近代西洋的知識を身につけたサハ人が、その近代性を追求しながら、同時に自らの土着性

を希求するといった態度も共通している。その一つの極は、クラコフスキーの軌跡に現れている。彼の特徴の第一は、ロシアの文学・文化・国家性を高く評価した上で、自らのアイデンティティを支えるサハの精神文化——つまりシャマニズムへの関心である。1920年代に発表された彼の民族学的諸論考は、その後1979年になって蒐集され出版された [Кулаковский 1979]。第二は、サハ人とロシア人は不可分な一体であるという認識に到達したことである [Дьяконова 2002 : 125]。実際、内戦期 (1919-21年) の間にクラコフスキーはサハ語の転写法を編み出すが、そこで用いられたのはキリル字であった。彼はサハ人のおかれた歴史的背景を考慮しつつラテン字による転写法よりもキリル字のほうが現状に適しているという判断を行ったのであった [Башарин 1994 : 52]。

1905年の第一革命以来のさまざまな社会変動のなかにあつて、クラコフスキーは革命的変革の意義そのものに懐疑的態度を示してように思われる [Башарин 1994 : 46]。むしろ前述した文化学術団体のような活動に積極的だった。死去する一年前の1925年にも学術研究団体サハ・ケスキレの設立に関与した [Бурцев 1994 : 158]。こうしたクラコフスキーは、同時代の知識人に対して大きな思想的影響を与えていた。単なる文芸的作品の創造にとどまらず、先述した「シャマンの夢」をはじめとして、「ヤクート知識人への手紙」(1912年) といったいわば政治批評を含む作品を数多く発表していたからである。

一方のニキーフォロフとクセノフォントフの場合、似たような傾向を持ちながらも、より明確な形で政治活動に関与している。ニキーフォロフは先述したように、1905年の第一次革命後にヤクート同盟を結成した。この時には300人もの郡 (ウルス) 代表が賛同し、同盟の設立会議に集まるほどだった。その活動では2度にわたって中央政府 (一度目は当時の首相ウィツェに、二度目は皇帝へ) に自らの主張を記した要求書を送りつけたが、政治的な成果は何もえることなくニキーフォロフ自身の逮捕をもって終結した (Гоголев 2000 : 179-181)。その後再び彼の政治活動が顕在化するのは、1917年二月革命後である。この時にはクセノフォントフも加わって、ヤクート連邦主義者労働同盟 (Якутский трудовой союз федералистов) が結成された。そもそも1917年3月にサハ人及びロシア人の農民を中心にして合法的政党として「自由党 (Свобода)」が結成されたが、6月に開催されたその大会において名称が「ヤクート連邦主義者労働同盟」と変更されたのである。政治的対場は当時の社会革命党に近く、その後さまざまな場面で共闘している。主要なメンバーは、上記二人に加えて、A. シローキフ (А. Д. Широких) や R. オロシン (Р. И. Оросин) 他である。彼らが連邦主義者をなしたのは、アメリカ合衆国の統治制度をモデルとし、脱中央主権・地方への権限委譲を中心的な主張としたからである。その綱領においては、連邦主体として「シベリア」を想定し、シベリア州議会 (Сибирская Областная дума) の設立を目指した。さらにヤクーチアを含むその構成内部では政治的自治の実現よりもむしろ文化自治を基本とした民族平等政策の実現が主張されている [Гоголев 2001 : 6-16 ; Демидов 1978 : 96-99 ; Радченко 1999 : 20-23]。

二月革命後のヤクート州コミッサール (政治委員) はすでに述べたように社会革命党の V. ソロビヨフであり、反ポリシェビキが力を持っていた。その中であつて黨員1,198人、20の地方委員会 (1917

年11月)をもつヤクート連邦主義者勤労同盟は大きな影響を持っていた。さらにそれを安定させるべく1917年9月には連邦主義者勤労同盟は社会革命党とともに、文化啓蒙協会サハ・アイマフ(Саха аймах)等を含めて、「ヤクート州合同民主主義(Объединение демократия Якутской области)」を組織した[Гоголев 2001:6-7; Радченко 1999:19]。ちなみにこのサハ・アイマフという組織は、クラコフスキーの意志を後継することを自認する知識人によって1917年6月に設立されたものである。そのメンバーはサハ語のアルファベット表記法を確立するS. ノブゴロドフ(S. A. Новгородов)や勤労同盟の中心メンバーでもあったR. オロシンら52人であり、(1)サハ語の発展、(2)フォークロア資料の収集、(3)文学の翻訳を組織の目的として掲げていた[Антонов 1998:13]。こうした合同の結果、1917年11月の全露憲法制定会議の代議員選挙ではクセノフントフと、社会革命党のV. パンクロトフが選出されたほか、すでに紹介したように翌年1月にはヤクート州の自治庁議長にニキーフォロフが選ばれたのであった。つまり1917年の十月革命以降であってもヤクーチアは反ボリシェビキ派が力を握っていたのである。その後のヤクーチア内部の内戦過程はかなり複雑な道筋を経るが、最終的には彼らは敗北し、ボリシェビキが1922年12月にヤクート自治共和国が成立した[Гоголев 1991:7-16]。

こうした三人と対称的に語られるのは、ボリシェビキ派にあったサハ人のM. アモーソフ(M. K. Аммосов)とP. オユンスキー(П. А. Ойунский)の二人である。1897年に生まれたアモーソフは一貫してボリシェビキの党人として生きた政治家であり、1920年にはシベリア革命委員会のヤクーチア組織における全権を、さらに1923～25年には全露中央執行委員会幹部会付属ヤクート自治共和国全権代表を務めた人物である[Сыроватский 1960:110]。これに対し、オユンスキーの志向は、先の三者と類似している。彼は政治家であると同時に、詩人・文学者・フォークロア学者だったからだ。ちなみに彼の本姓はスレプツォフであり、オユンスキーはサハ語でシャマンを意味する「オユン」に由来するいわばペンネームである。彼は1893年バトゥルース郡(Батурусский улус)で生まれるが、この郡には当時何人ものサハの口頭伝承オロンホ(英雄叙事詩)の歌い手がおり、さらにペカルスキーやイオノフらの政治犯流刑囚出身の民族学・言語学者も住んでおり、そうした環境がオユンスキーの性向に影響したといわれている。彼は一代前のクラコフスキーらの文芸活動にも感化され、学術文化活動をおこなうが、政治的立場はボリシェビキに属し、その後政治指導者の道を歩んだ。1922年にはヤクート自治共和国人民委員会(Совнарком)議長、つづいて同共和国中央執行委員会議長を務めるなど要職を歴任した[Даниров и Окороков 1978:8-12]。

彼らが主要な指導的位置をしめたヤクーチア・ソビエト権力確立下において、前述の三人が学術・文化行政の職についたのはすでに見てきたとおりである。その彼らが一同に介する機会となったのが、1921年にロシア共産党(ボ)ヤクーツク当局の命令によって作られた「サハ・オムク Саха омук」であり、1925～1930年に実施されたソ連科学アカデミーによるヤクーチア総合調査であった。

サハ・オムクは、もともと先に紹介したサハ・アイマフを継承する文化啓蒙団体である。サハ・アイマフはその反ボリシェビキ的性格のため、ソビエト権力下のヤクーツク政府によって1920年8月活

動停止命令がだされるが、その教育文化活動そのものの必要性は認められ、共産党員の知識人を加えることで再編されることが決定されたのであった。そのメンバーは共産党員からアナキスト、社会民主主義者、連邦主義者、トヨンもふくめ当時のサハ人のほぼすべての知識人が関わっていたといわれる。正式な人数の記録はないが内務人民委員部（НКВД）の資料では最大時1,124人だったと記録されている。彼らは人文系研究を進めると共に、劇場芸術・出版活動を行い、さらに地方にもいくつもの支部を持ち、当時のヤクーツクのボリシェビキ政府も無視できない力をもっていた。次第にこの団体は反ソビエト的性質を持つものとして治安当局に認識され、最終的に1928年には廃止されている〔Антонов 1998：14-24； Антипин 1963：110-113〕<sup>9)</sup>。

## 5. 科学アカデミーによるヤクーチア総合調査の意義

ヤクーチア総合調査は、ヤクーチア自治共和国の国民経済と文化状況の向上の方法を模索するための基本的科学的資料を入手する目的でアモソフがイニシアティブをとりながら企画されたものである。とはいっても、そうした発想はすでにモスクワ中央政府によってその必要性が認められていた。そもそもの発端は、十分な天然資源の調査が行われていなかったことに由来する第一次世界大戦中の鉱物資源不足であった。これを受けて当時の帝政ロシア政府は、V. I. ベルナツキーを中心とする「天然生産力に関する常時委員会 КЕПС」を設立した。そこでは天然資源・地学・歴史及び民族構成に関する総合研究の国家的必要性が説かれたが、それはソビエト政権になっても引き継がれ、むしろその役割は拡大していったのである。こうしたなかで人文社会科学から自然科学に至る総合調査を科学アカデミーが引き受ける制度的基盤は整っていた〔Ермолаева 2001：16-29〕。

1924年3月アモソフは、ソ連科学アカデミーに総合調査を要望した。これをうけてアカデミー内部にヤクーチア調査委員会（КЯР = Комиссия по изучению ЯАССР）が設けられたが、その設立に際しては、当時中央で有力な研究者となっていたボゴラスやペカルスキー、マイノフといったかつてヤクーチアに流刑されていた知識人達の協力があった〔Ермолаева 2001：45〕。そして調査委員会は、1925年から5年間にわたる民族学・公衆衛生学・経済統計・森林経済・狩猟漁労・魚類学・農学・地理学・地質学・水利学・気象学といった分野で調査の遂行を決定したのである。調査委員会委員長であった P. V. ビッテンブルグはこの調査が18世紀のメッセルシュミット調査に匹敵し、科学アカデミーにとっても重要なものだと認識していた。それは単に人文社会科学と自然科学の総合というだけではなく、そこに医学・公衆衛生学さらに農学などが加わった応用的調査の側面が含まれていたからである。現地調査では246人の研究者が参加し、そのうち現地出身の研究者は43人だった〔Ермолаева 2001：53-64〕。ソ連科学アカデミーに協力したヤクーチア側の学術組織はオユンスキー、クラコフスキー、さらにペカルスキーらも加わる形で1925年に設立された学術研究団体サハ・ケスキレである。これはヤクート自治共和国中央執行委員会幹部会の決定によって設立された公式の団体で、全露シベリア・ウラル・極東研究協会の支部であった（1930年にはロシア地理学協会ヤクーチア支部

と合体し、ヤクート地方研究協会となる)。ここを通してニキーフォロフやクセノフォントフらは実際の調査に従事したのである。その他、ヤクーチア出身のロシア人民族学者である A. ポポフ (A. A. Попов) や G. ポポフ (Г. А. Попов) などもいた [Антипин 1963 : 113, 160 ; Ермолаева 2001 : 98, 119, 127-128]。すなわち民族学分野についていえば、この調査は、19世紀末から20世紀初頭の政治犯流刑囚の民族学者及びイルクーツク大学の民族学関係者などもふくむ当時のサハ研究者のほとんどが何らかの形で集結したものだだったのである。最終的に、調査のなかで民族学標本資料は1084点・写真ネガは459本が収集された。しかしその成果報告書は民族分野については残念ながらほとんど刊行されなかった。その理由は十分わかっていない。民族学調査に従事したものの多くがその後肅正されてしまうことや、ソビエト権力が民族学の成果に関心を示さなかったからだともいわれている [Ермолаева 2001 : 103-104]。

調査に関する出版は民族学分野以外で膨大な量となった。その主要な刊行物は47巻から構成される「ヤクート自治共和国調査委員会紀要 (Труды КЯР)」と39分冊から構成される「ヤクート自治共和国調査委員会資料 (Материалы КЯР)」である。なおここでは、19世紀末に行われたシビリャコフ調査の未刊行の成果もあわせて刊行されており、ペカルスキーのサハ語辞典も初版は後者のシリーズから出版された [Ермолаева 2001 : 131-138]。

アモソフら自治共和国政府首脳にとって最も深刻だったのは、公衆衛生学的調査の結果だったという。なぜなら、19世紀末の帝政ロシアの国勢調査以来、サハ人も含めたシベリア先住民は将来死滅すると危惧されていたからである。調査に従事した医学者達の答えはこれに否定的であったが、衛生条件を向上させるため、当時サハ人の住居の典型であった家畜小屋 (хотон) と住宅 (юрта) が合体したタイプは二つを分離するよう助言された。彼らはサハ人の疾病率の高さの原因を衛生条件の悪さをもたらす伝統的家屋とシャマンによる民俗医療に見いだしたのだった。また畜産学調査によって家畜飼養についてもさまざまな改善が指摘されている [Ермолаева 2001 : 83-84, 92-94, 104-106]。こうした成果は、その後の反宗教政策・農業集団化を含めた社会主義化政策の実施を考えるとさまざまな意味で示唆的である。実際、後に家畜小屋と住宅部分の分離は法律で明記された。また自由放牧されていた家畜に対しての飼料飼育法や草の研究も進められた。そして何よりもこのヤクーチア総合調査はその後のヤクーチアにおける学術ネットワークの人的・制度的建設の基盤になったのである [Ермолаева 2001 : 141-148]。

上述の5人が相互に協力する機会をあたえた総合調査であったが、その民族学的研究の成果が十分な形で世に出ることはなかった。五年間の調査中にクラコフスキーは病死し、さらにニキーフォロフは肅正、さらに1938年にはクセノフォントフもまた肅正されることとなったことはすでに述べたとおりである。さらに一貫してボリシェビキであったアモソフとオユンスキーもまた反革命罪にとわれ共に1939年に肅正されたのであった [Макаров 1986 : 8 ; Федоров 1994 : 168-170]。



## 6. おわりに

以上駆け足で、戦間期のサハ民族学の位置づけと、これに関わった民族知識人達の軌跡とその背後の状況を描写してきた。それは19世紀末～20世紀初頭の古典的民族誌と1940年代以降のソビエト民族学におけるサハ研究の間の隙間を埋めることであった。この点について序論で掲げたように一定の見取り図をつくることはできたと思う。

この時代のサハ人研究者は、民族学的研究に従事すると共に、政治文化活動に関わる実践家であった。彼らはロシア＝西洋という枠組みの近代性を受け入れた上で、自らの土着性を崇高なものとして自覚し、その双方を自民族に啓蒙することを課したといえる。こうした態度はこの時代の帝政ロシア内あるいは世界各地の民族知識人に共通する側面をもっているといえよう。注意したいのは、彼らの思想的・学術的蓄積とは異なる文脈でサハ民族学研究をめぐる制度的確立がされたということである。それは1930年代以降、ソ連における民族学が、帝政時代以来のフィールドワークに基づく良質な民族誌記述と比較研究という性質から、史的唯物論に基づく歴史科学の下位部門としてのソビエト民族学（этнография）に変質していった過程と重なりあうことはいうまでもない。

1940年代以降、ここで紹介した三人のような学術研究と社会実践の双方を掲げながら活躍する民族知識人は当然ながら現れていない。その意味では彼らは過渡期に生きた知識人であり、その過渡性とは、帝政ロシアの植民地主義体制のなかで紡がれていた他者による民族学及び文学の思考の様式を、自らのものへと領有することの試みだった——ということができよう。残念ながら、その成果は十分に結実する以前に、彼らは消えていったのである。とはいえ、第二章で触れた1940～60年代にかけてのサハの歴史的な社会構成についての問題における論争に現れているように、その後に職業的知識人となった後裔達は、さまざまな形で自らの祖先を同定する作業を試みたのたのだった。それが1990年代以降の現代へと連なっているのである。おそらくここから見えてくる問題の地平は、ロシアにおける民族学のなかでサハ人が自らサハ民族学研究を行うこと、それ自体の意味を問うことであろう。この新しい課題を見いだしたことをもって、本稿を閉じたいと思う<sup>10)</sup>。

## 注

- 1) サハとは民族自称であり、ヤクートとはロシア語による民族名称である。ヤクーチアはヤクートの土地という意味であり、本稿においてこの言葉が指し示す空間領域はソ連時代の「ヤクート自治共和国」、現在のロシア連邦における「サハ共和国」とほぼ同じである。
- 2) 本稿における民族学とは特に断らない限り、帝政ロシア時代及び現在のロシアにおける民族学（этнология）、その間のソビエト民族誌学（Советская этнография）の双方を意味している。
- 3) 以下様々なサハ人研究者の名前が列挙されるが、そのほとんどはロシア人風の姓・名・父称である。こうした洗礼名に基づく姓名が普及したのは19世紀から20世紀初頭だったといわれている。同時にこの時期にロシア正教会の洗礼・葬儀法・復活祭の導入や民族衣装に十字架を付けるといった習慣が定着した。教育分野で

は、1903年にヤクート州において教会系の学校は77校あったのに対し、政府系のは17校にすぎなかった。20世紀初頭の知識人には教会系の学校出身者が多いといわれる [Николаев и Васильев 2000 : 243-244]。

- 4) なお、ソ連崩壊後、この言語文学歴史研究所は「人文学研究所」と名称をかえ、ロシア科学アカデミーから独立し、サハ共和国アカデミー（1993年設立）付属となった。
- 5) 当初は《Ученые записки》、後に《Труды института языка, литературы и истории ЯФ СО АН СССР》と変更した。
- 6) 先のサハの歴史的社会的構造をめぐる問題もそうであるが、それ以外にも1950年代の「ソビエト民族学 (Советская этнография)」誌上で論争された北西ヤクーチアの住民 (エヴェンキ、サハ、ドルガン) の民族的属性 (エスニシティ) をめぐる問題が挙げられよう。
- 7) なおその後ポリシェビキ政権の検閲によって一部を改編した新しい版が1924年に発表されている [Argounova 2001 : 102]。
- 8) かつて青木節也 [1980] はクラコフスキーが反ポリシェビキとして民族主義者であることを強調したが、その見解は一面的すぎると思われる。
- 9) この時期の政治運動としては、先述したガブリエル・クセノフォントフの実弟パーベル・クセノフォントフによる1927～1928年の連盟主義者運動がある。彼は内戦期を経てすでに確定したヤクート自治共和国の位置づけの再考を迫った。連邦共和国・自治共和国・自治管区等というように階層化された民族自治ではなく、アメリカやスイス連邦を見本とし、平等の単位によるソビエト連邦の再編を主張した。1927年8月10日に連盟主義者党を結成したがその主な政治的主張は (イ) 執行機関と立法機関の分離 (ロ) ソビエト政府に対する不信任を表明する権利の確保 (ハ) ヤクートの最高裁判所の独立性の確保だった。1927年8月末から弾圧が開始されるが、当初、サハのポリシェビキは和解をもくろんだ。これが中央政府から批判され、1928年2月から大量の逮捕者となった。その後1928年8月9日の共産党ビューロー決議「ヤクートのポリシェビキ組織の状態について」アモソフを始め当初融和的態度をとったサハ共産党関係者も批判の対象とされた。連盟関係者は罷免か粛正、最終的に34人が銃殺され、50人近くが流刑となった [Argounova 2001 : 72-85 ; Антонов 1999]。
- 10) この論文は、国立民族学博物館共同研究「ポスト社会主義における民族学的知識の位相と効用：制度としての人類学の多元性解明にむけて」の成果の一部である。なお、上記共同研究メンバーの渡邊日日氏より、本稿脱稿後、「帝国の文化か、批判の表象か——帝政末期シベリアに於ける『民族詩的多様性』について」(『超域文化科学紀要』8号、5-44頁、東京大学、2003年)を拝受した。筆者の調査不足により、本稿に多くの点で関わる上記・渡邊氏の論考を検討できなかったことを記しておきたい。

## 参考文献

青木節也 1980

「ユーラシア革命の現代史によせて」『ロシア史研究』31 : 43-53。

イワノフ ウシーリィ 2000

「サハ共和国 (ヤクーチャ) における民族学研究」斎藤晨二 (編)『シベリアへのまなざしⅡ : シベリア狩猟・牧畜民の生き残り戦略の研究』、7-17頁、名古屋 : 名古屋市立大学。

宇山智彦 1997

「20世紀初頭におけるカザフ知識人の世界観」『スラブ研究』44：1-36。

佐々木史郎 2002

「ソビエト民族学によるシベリア・極東研究概観」煎本孝（編）『東北アジア諸民族の文化動態』、9-31頁、札幌：北海道大学図書刊行会。

枡本哲 1993

「レニングラード民族学派」E. A. クレイノヴィッチ『サハリン・アムール民族誌』、378-395頁、東京：法政大学出版局。

Алексеев Е. Е. 1996

Библиография А. Е. Кулаковского // Алексей Елисеевич Кулаковский — Библиографический указатель. Якутск : Национальная библиотека РС (Я). С. 5-18.

Антипин В. Н. и т. д (ред.) 1963

История Якутской АССР. Т. 3. Советская Якутия. Москва : Издательство АН СССР.

Антонов Е. П. 1999

Идей конфедералистов о государственном суверенитете Якутии в 1927-1928 гг // Иванов В. Н. (ред.) Государственность Республика Саха (Якутия). История, современность, будущее. Якутск. С. 33-38.

Антонов Е. П. 1998

Культурно - просветительное общество «Саха Омук» (1920-1928 гг.). Новосибирск : Наука.

Башарин Г. П. 1994 (1944)

Три якутских реалиста - просветителя. Якутск : Республиканское общество «Книга».

Борисов, С. 1951.

За правильное освещение истории якутской литературы // Правда 10 Дек. 1951. С. 3.

Бурцев А. А. 1994

Кулаковский как поэт - мыслитель // Полярная звезда №1. С. 157-164.

Гоголев А. И. 2001

Якутия : век XX (1917-2000 гг.). Якутск : Издательство ЯГУ.

Гоголев А. И. 2000

История Якутии. Обзор исторических событий до начала XX в. Якутск : Издательство ЯГУ.

Григорьев М. Г. 1978

Первый якутский историк // Известия Сибирского отделения АН СССР. Серия общественных наук. 1978. №1. С. 163-166.

Гурвич И. С. 1966

Этническая история Северо - Востока Сибири. Москва : Наука.

Гурвич И. С. и Пухов И. В. 1958

Е. К. Пекарский. К столетию со дня рождения // Советская этнография. 1958. № 6. С. 54—60.

Даниров С. и Ожороков Г. 1978

Поэзия борьбы и создания // П. А. Ойунский Стихотворения. Ленинград : Советский писатель. С. 5—34.

Демидов В. А. 1978

Октябрь и национальный вопрос Сибири 1917—1923 гг. Новосибирск : Наука.

Долгих Б. О. 1960

Родовой и племенной состав народов Сибири в XVII в. Москва : Издательство Академии наук СССР.

Дьяконова Н. Н. 2002

Якутская интеллигенция в национальной истории. Новосибирск : Наука.

Ермолаева Ю. Н. 2001

Якутская комплексная экспедиция 1925—1930 гг. Развитие науки в Якутии. Новосибирск : Наука.

Зелинский К. Л. (ред.) 1970

Очерк истории якутской советской литературы. Москва : Наука.

Иванов В. Н. 1992

«Ураангхай — Сахалар» Г. В. Ксенофонтова // Ксенофонтов Г. В. Ураангхай — Сахалар. Очерки по древней истории якутов. Том 1 в 2-х книгах. Якутск : Национальное издательство Республика Саха (Якутия). С. 5—10.

Иванов В. Н. 1973

Советские историки — якутоведы. Якутск.

Иванов В. Н. 1971

К вопросу об изучении дореволюционной историографии и истории народов северо-востока Азии // Сафронов Ф. Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск. С. 106—113.

Клиорина И. 1991

Возвращение Никифоров // Илин 1991 № 2. С. 6—8.

Ксенофонтов Г. В. 1992 а (1937)

Ураангхай — Сахалар. Очерки по древней истории якутов. Том 1. Якутск : Национальное издательство Республика Саха (Якутия).

Ксенофонтов Г. В. 1992 б (1937)

Ураангхай — Сахалар. Очерки по древней истории якутов. Том 2. Якутск : Национальное издательство Республика Саха (Якутия).

Кулаковский А. Е. 1992 (1912)

Якутской интеллигенции. Якутск : Якутское книжное издательство.

Кулаковский А. Е. 1990 (1924)

Сновидение шамана. Москва : Художественная литература.

Кулаковский А. Е. 1979

Научные труды. Якутск : Якутское книжное издательство.

Кулаковский А. Е. 1977 (1910)

Песня якута. Стихи и поэмы. Москва : Советская Россия.

Левин М. Г. и Л. П. Ютапов (ред.) 1961

Историко – этнографический атлас Сибири. Москва и Ленинград : Издательство Академии Наук СССР.

Макаров Д. С. 1986.

М. К. Аммосов //Максим Кирович Аммосов. Биобиблиографический указатель. Якутск : Якутское книжное издательство. С. 7–11.

Малькова, А. 1994

Василий Никифоров. События, судьбы, воспитания. Якутск : Бичик.

Николаев А. П. и Васильев Б. Е. 2000

Религиозный фактор в межэтнических отношениях : ретроспектива и современность // Этносоциальное развитие Республика Саха (Якутия). Новосибирск : Наука. С. 239–269.

Парникова А. С. 1971

Этнографическое изучение Якутии в советское время // Сафронов Ф. Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск. С. 33–47.

Радченко Н. Н. 1999

Государственно – правовое устройство России в программе якутского трудового союза федералистов //Иванов В. Н. (ред.) Государственность Республики Саха (Якутия) : История, современность, будущее. Якутск : ИГИ АН РС (Я). С. 19–25.

Решетов, А. М. 1994 а

Репрессированная этнография : люди и судьба (часть 1) //Кунсткамера : этнографические тетради. 1994. Вып. 4. С. 185–221.

Решетов, А. М. 1994 б

Репрессированная этнография : люди и судьба (часть 2) //Кунсткамера : этнографические тетради. 1994. Вып. 5–6. С. 342–368.

Соловей Т. Д. 2001

«Коренной перелом» в отечественной этнографии конец 1920 х – начало 1930 гг. // Этнографическое обозрение 2001 № 3. С. 101–121.

Софронов П. С. 1971

Изучение истории якутов первой половины XVIII века // Сафронов Ф. Г. (ред.) Вопросы историографии и источниковедения Якутии. Якутск. С. 83–99.

Спиридонов И. 1994

Подвиг ученого // Башарин Г. П. Три якутских реалиста – просветителя. Якутск : Республиканское общество «Книга». С. 3–7.

Сьроватский А. П. 1960

Из документов о революционной и общественно – политической деятельности М. К. Аммосова в Сибири // Сборник научных статей (Якутский республиканский краеведческий музей им. Е. Ярославского). 1960. № 3. С. 109–139.

Токарев С. А. 1945

Общественный строй якутов XVII – XVIII вв. Якутск.

Тумаркин Д. Д. 1999

Репрессированные этнографы. Москва : Восточная литература РАН.

Федоров М. М. 1994

О деле П. А. Ойунского // Полярная звезда 1994 № 1. С. 168–174.

Хороших П. П. 1924.

Якуты. Опыт указателя историко – этнологической литературы оякутской народности. Иркутск.

Argounova, T. 2001

*Scapegoats of Nationalism : Ethnic Tensions in Sakha (Yakutia), Northeastern Russia.* Unpublished Ph.D. dissertation in social anthropology. Cambridge : University of Cambridge.

Diakonova, N. & E. Romanova 2003

The role of the Yakut intelligentsia in the national movement. In H. Takakura ed., *Indigenous Ecological Practices and Cultural Traditions in Yakutia.* Pp. 13–22. Sendai : Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University.

Katsuki, H. 2003

The foundation of Soyuz Yakutov and the political exiles. In H. Takakura ed., *Indigenous Ecological Practices and Cultural Traditions in Yakutia.* Pp. 23–32. Sendai : Center for Northeast Asian Studies, Tohoku University. 2003 :

Slezkine, Y. 1994

*Arctic Mirrors : Russia and the Small Peoples of the North.* Ithaca : Cornell University Press.

Shnirelman, V. 1996

*Who Gets the Past? Competition for Ancestors among Non-Russian Intellectuals in Russia.* Baltimore and London : The John Hopkins University Press.

Theodoratus, R. 1977

Waclaw Sieroszewski and the Yakut of Siberia. *Ethnohistory* 24–2 : 103–115.